胃集団検診(職域)

動 向

胃間接X線撮影検査は、胃癌の早期発見などに効果的であることは言うまでもないが、食道ではポリープ、潰瘍、腫瘍、狭窄、変型、憩室、ヘルニアなど、胃では癌の他に胃炎、潰瘍、ポリープ、腫瘍など、十二指腸では潰瘍、ポリープ、変型、憩室、狭窄など多くの疾患を発見できる検査である。

本検査においては、近年、デジタル撮影装置が普及し、デジタル処理による画像の拡大、濃度調整が可能となり過去の画像との比較が容易に出来るようになり、読影精度が向上している。

平成24年度の職域における胃間接X線撮影検査の 受診者数は、50,479名であった。昨年度より2,451 名の受診減であったが、男女別には男性が昨年比 2,305名減、女性が昨年比146名減であった。

当協会では、詳細な注意事項を記載した注意書を 受診票に同封する等、受診者の安全性を確保し、最 新の装置による高精度な検診サービスの提供に努め るとともに、有所見者に対しては専門外来における フォローアップの他、各医療機関との連携による対 応を行っている。

方法・結果

平成24年度の胃癌X線検診受診者数は68,816名である。そのうち精密検査が必要とされたのは3,268名4.7%であり、職域受診者では50,479名のうち1,978名3.9%、地域検診では18,337名のうち1,779名9.7%と両者の間に著しい差がみられる。ただし、両群間では年齢などに大きな隔たりがあり、単純に比較対照することはできない。

胃癌発見数は8名0.02%となっている。

国立がんセンター癌情報対策センターの2008年の 集計と比較すると、40歳代の罹患率に近く、受診年 齢を勘案すれば概ね妥当な結果と言える。

この胃癌発見率の結果から、バリウムによる胃癌検診は胃癌の罹患統計におおむね沿ったがん発見率を示すと考えられ、この方法が胃癌検診にふさわしいことを示している。バリウムによる検査は一人の技師で午前中におおよそ50人くらいが可能である。大師で午前中におおよそ50人くらいが可能である。大師である。大師である。大師である。大師の手では延べ10時間にち名程度であり、50名の検査を行うには延べ10時間にち名程度であり、50名の検査を行うには延べ10時間によが必要である。医師、看護師のチームが4組無ければバリウム検診と同じ効率で進めることはであるには所していただく場合は、バリウムを飲みたくない場合などであるいは何らかの理由で飲ませたくない場合などであるいは何らかの理由で飲ませたくない場合などで

は内視鏡での検診でよいと考える。なお、この場合も集団検診全員への対応は難しいと考えている。

侵襲が少ないとして経鼻内視鏡を推奨する考えがあり、当協会でも施設検診では希望者に対し実施している。機器の進歩により観察に関しては通常の内視鏡と大差ないところまで来ている。

考 察

血液検査だけで胃癌の可能性を判別するとして、ペプシノーゲン、あるいはそれとピロリ菌の抗体の有無を組み合わせたABC検診というものが行われるようになっている。ペプシノーゲン検査は胃粘膜の萎縮の程度を推し量る検査である。この根拠の一つとして、胃癌は胃の粘膜が委縮性の変化を起こした場合に発生しやすいという古くからの統計があり、1960年代にはドミニカ人と同地に移住した日本人の胃癌の発生と胃の粘膜の萎縮の度合いを比較した研究などが報告されていた。胃癌は萎縮した粘膜から発生しやすいが、萎縮の無い粘膜から発生しないわけではない。

1980年代の終わりに胃の中にピロリ菌が繁殖していることをオーストラリアの研究者が証明した。当初は胃潰瘍との関連で研究がすすめられ、胃潰瘍を繰り返す人に除菌を行うと潰瘍の再発が少なくなることが明らかにされた。胃癌については実験的な証明はされておらず、もっぱら疫学的な検討から胃癌のリスク因子として認識されるようになった。ピロリ菌の検査には様々な方法があるが、血液中のIgG抗体を測定する方法が最も簡便である。しかし除菌後のIgG抗体の変動は非常に遅い。

このピロリ菌に対するIgG抗体の検査とペプシノーゲン検査を組み合わせたのがABC検診であるが、ABC検診ではピロリ菌とペプシノーゲンがともに陰性の場合胃癌の発生率は0%で、内視鏡は行わなくていいことになっている。ところが胃癌症例511例と胃癌の無い511例を比較した研究では、胃癌症例の3.1%がピロリ菌・ペプシノーゲンともに陰性のグループに入っていた。したがって本法が胃癌検診として盤石であるとはまだ言い難い面を残している。しかしコストと侵襲は少なくて済むことから、ABC検診を希望するケースも増えている。

はじめに述べたようにバリウム検診が胃癌検診として最も妥当であるが、コストや侵襲を勘案してABC検診を挟むことは可能である。しかし、安全のためには2年に1回はバリウム検診とすべきと考えている。

関係の集計表は79頁に掲載